

家族への葉書

がくせいじだい よねんかん ふくい じっか じつ はがき か みつか
学生時代の四年間、福井の実家にあてて、実によく葉書を書いた。三日に
にまい わりあい おも がつ にち ようび どう
二枚、というぐらいの割合だったかと思う。「×月×日(×曜日)お父さん、
かあ たいち げんき か だ
お母さん、太一くん元気ですか？」というのが書き出しのパターン。このあ
がっこう かつどう たにちじょう
とは、学校のこと、クラブ活動のことアルバイトのこと、その他日常のも
ろもろについて、思いつくまま書きつらねた。常に葉書を持ち歩いていて、
じゅぎょう はじ まえ きつさてん ひと ま あいだ だ か
授業の始まる前、喫茶店で人を待つ間、どこでもとり出して書いていた。
かんせい はがき よこはば はば たてせん
官製葉書の横幅は10センチ。それにボールペンで5ミリ幅に縦線をひいて、
じ か うらがえ な したはんぶん どうよう つか う
こまかい字で書く。裏返してあて名の下半分も同様に使って、埋まったと
ころでポストに入れる。

いまよ かえ たあい ないよう ね あ
今読み返してみると、まことに他愛のない内容ばかりだ。キャベツが値上
きょうじゅ じょうだん い つく
がりしたとか教授がこんな冗談を言ったとか、シチューを作りすぎたとか
なに ようじ か なん にちじょう
…。何か用事があるって書くというのではない。ただただ何てことない日常の
ひと
一コマを

きょう か
「ねえ、今日こんなことがあったのヨ」とおしゃべりするように書いていた。

にちじょう
おしゃべり...そう、あれは日常のおしゃべりのかわりだったのかもしれない。
とうきょう で ひとりぐ あさお
いはじめて東京に出てきて、いきなりの一人暮らし。朝起きて「おはよ
う」という人がいない。「いただきます」も「いただきます」もない。家族と

かいわ いしき くうき
の会話なんて、それまで意識したこともなかった。それは空気のようなもの。

そんざい きづ わたし さび
なくなってはじめて、存在に気付く。私は寂しさのあまり、ホームシック

こきゅうこんなん とかい くうき うす かぞく
という呼吸困難にかかりはじめていた。都会の空気はあまりにも薄く、家族

かいわ さが じぶん
との会話にかわるものはなかった。そこで、かわりを探すのではなく、自分か

くうき う だ はがき おも
ら空気を生み出してしまうおうとしたのが、あの葉書だったのではないかと思
う。

そだ きんじょ としよかんいん しんせつ しけん
パセリがうまく育ったとか、近所の図書館員はとても親切だとか、試験が

ちか ゆううつ ちい じ か よ はがき
近くて憂鬱だとか...小さい字でごちゃごちゃ書いてある読みにくい葉書を、

よろこ う と ひと よ なんにん
あたりまえに、あるいは喜んで、受け取ってくれる人がこの世に何人いる

かぞく まちが となり うち
だろうか。家族とはそういうものなのだと思った。もし間違っても隣の家に

はいたつ むいみ かみき なんじゅうまい なんびやくまい
配達されたとしたら、まったく無意味な紙切れである。何十枚、何百枚と

はがき はは はこ い
いう葉書を、母はきちんと箱に入れてとっておいてくれた。

ひさ だ か いちまい
久しぶりにとり出してみると、こんなことを書いている一枚があった。

つゆ あつ あつ
「…梅雨もあけて、だんだん暑くなってきました。けれど、暑くなってきたね

はな ひと こころ なか おも
ーと話しかける人がいません。ただ、心の中で思っているだけです。」

はがき すうねんご たんか つく わたし かどかわたんかしょう じゅしょう
この葉書から数年後、短歌を作りはじめた私は、角川短歌賞を受賞し

なか
た。その中に、

さむ はな さむ こた ひと
「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさという

いっしゆ こい うた う うた たね
一首がある。恋の歌として生まれたものだった。が、この歌の種は、それよ

いぜん かぞく はがき なか め ぼ おも
りずっと以前、家族にあてた葉書の中すでに芽生えていたのだなと思った。

たわら ま ち
俵 万智